

報告と討論 1 「大学理念と個性化科目」

★司会

第1部の報告と討論1、「改革カリキュラムの実現にむけて」を始めたいと思います。予定としましては、センター長の小林先生と、人文学部の福田一雄先生に、それぞれ30分ほどのお話をいただいて、あと残りそれぞれ30分ずつ質疑応答ができればと思っております。

それでは、小林先生、よろしくお願いします。

★小林

教養教育の実施委員会の委員長と、大教センターのセンター長を兼任しております小林昌二でございます。

午前中、ごあいさつでは簡単にしか申し述べませんでしたが、午後に立ち入った話をさせていただくということで、踏み込まなかったわけではありますが、お手元に今日お話ししようと思うことを1枚にまとめておりますが、あともう一つ、こちらのOHPに映っているものと同じものを印刷し、用意させていただいております。

「テーマについて」

さて、「大学理念と個性化科目」というちょっと聞きなれないテーマにさせていただきましたのは、平成14年度の授業から、新しい内容を盛り込んだカリキュラムを実施するというので、これまでのカリキュラムの問題点のどこを変えようとしているのか、その幾つか改革しようとしているものの一つとして、個性化科目という名称をつけて科目を立てています。その内容を決めなきゃならなかったのは、6月、7月の実施委員会でもあり、また8月にも実施委員会をさせていただきまして、論議を重ね、ようやくその結論的な点に到達しました。これに基づきまして、各系列の会議でそうした科目を立てていただくことをお願いし、作業もしていただいている段階に現在あるわけです。

それで、用意いたしましたレジュメの方で「①経緯と問題の在処」をちょっと見ていただこうと思います。

まず、経緯のほうを申し上げますと、その大筋は、レジュメによりますが、少し立ち入って申しますと、これまでの8系列の科目群を私どもはやっているわけです

が平成5年、6年に改革をやりまして、6年度から全学で教養教育を協力してやっていく全学出動体制になったわけです。学内措置の大教センターは、そのときに発いたしました。それ以前の教養部時代の科目の中で、総合科目に入っていました情報処理科目群を独立させ、また、日本語・日本事情科目群も独立させる変更を行って、8系列の科目群でやってまいっているわけです。細かな改革や改善をやっていることはむろん他にもあるんですけども、基本骨格はそうなっているわけであり

ます。ちなみにその点を、OHPで見えますと、1番目から8番目の科目の中で総合科目群を最初に立てまして、その総合科目の中は、人文系、社会系、自然科学系となっている、そういうレベルの総合科目群を立てて、2番目に人文科学、3番目に社会科学、4番目に自然科学、5番目に外国語。そして先ほどの情報処理科目群をとばしまして、健康スポーツ、と見て行きますと、教養部時代のカリキュラムとそっくりではないか。今ほど申し上げたように、6番目と8番目が加わっていますが、平成6年度から実施したカリキュラムは、そこに新味があったとはいえ、構造的には変化していないわけです。時代の要請もあり、情報処理科目群を全員履修できるようにということで、この間努力を続けました。あるいは昨今の学生がやはり未履修の科目を随分抱えていたり、文系学生が自然科学の授業科目を取ろうとしないという新しい事態に対して、平成7年度に、急遽総合科目の自然系の強化を軸に総合科目数を増やしました。

その結果、総合科目群がぐっと膨らみまして、当時で63科目になったと思います。この63科目という数は全国で有数の総合科目を持つことになったわけですが、急遽そうした努力もしたんですけども、総合科目の科目目的が一体何なのか、又学生が単に単位を取りやすくなっただけではないか、といろんな批判がございました。

そこで、総合科目のほうでもいろいろ検討を加えて、これは科目目的を明確な主題科目に移行させようと4年も5年も前から検討を重ねてきており、平成14年度から、それを実現させていく第一のことになるわけです。

このように、とにかく8系列の科目群で、私どもは7年間やったわけですね。次に、この間に依然として解決がついていない問題です。入学時の学生の勉学意欲、これから本格的に勉学だという5月の連休明けになると、急速に勉学意欲が失われてくる。そこにセメスター制を導入したわけですが、セメスター制を2学期制の4単位から2単位への移行だというふうにとらえる向きもあるんですが、セメスター制についてそういうふうに申し上げた覚えはないわけですね。第1セメスターを学ぶことによって、第2セメスターに進めるようにという、学習の段階を追ったものにしていく必要があるということを、学生とともに、私たち自身がはっきり持たなきゃいけないことを申ししてきましたが、そういうカリキュラムになっているのかという問題もございました。

次に3番目のところで、学習目的が明確な英語科目というように、これを改善しようと1年半をかけて、外国語教育改善特別検討委員会で検討していただきました。「中間報告」となっていますのは、何も話が中間という意味ではないんで、まだ英語だけしか出ていないので、外国語教育改善の中間報告になっています。「中間報告」が取れるのは、初修外国語の改革が入ったときということであります。既に各学部におきましては、学部が英語教育の理念なり目標なりを持って、英語教育の専門家たちと相談して、テキストや達成目標専門英語とつながる英語教育を実施していこうという提言をし、御検討いただいているものです。

四番目にスタディスキルズという言葉で、しばらく御検討いただき、積極的に導入していただいた工学部や農学部等が、1年次学生に行き届いた少人数ゼミをということですのでやってまいっております。

これが平成14年から導入しようとする授業科目の中に入ってくるということになっていくわけなんです、この説明はまたちょっと後に回させていただいて、なおこの問題の所在から改革カリキュラムの核心と個性化科目ということについて話を進めていこうというふうに思います。2番目にそういうタイトルで話をさせていただきます。

「個性化科目とカリキュラム上の位置」

それで、その第1点ですが、教養教育における教養科目名称を全学共通科目に変更させていただくことです。これは大学教育委員会等で検討してきました。その大学教育委員会報告が昨年7月に出されまして、その実現努力が要請され、昨年8月より実施委員会委員長名で、各学部具体的な実施方法の案の検討をお願いしましたが、それをちゃんと回答して下さったのが1学部しかございませんでしたので、論議の中でその辺を深めたいこうと実施委員会での検討の努力を重ねてまいりました。

その検討結果は、本年5月31日に提出締め切りの大学評価機構の実情調査報告書に記載し、報告をしている中身ですけれども、その中身がお手元の資料に付しております。

矢印から見ていただくとわかるように、平成6年度の科目区分との関係で言いますと、それぞれの科目の中で、共通基礎という第1番目にカテゴライズされた大学で学ぶための基礎的スキルを1年次で身につけるとした内容です。

第1番目は、大学学習法で、これは新しく立てる授業科目です。具体的には、これまでに既に半ばの学部で実践されてきたスタディ・スキルズのことで、発表討論、レポート作成などの作法を学ぶというふうにしております。第二番目の1年次外国語科目ですが、とくに英語については、改善したものとして取り組むものです。

3番目には、健康スポーツ科目の実習があり、4番目は情報リテラシー科目の全員履修が実現するようになっています。それから、5番目に、問題の新潟大学個性化科目と呼んでまいりましたが、科目名称としましては、「地域入門」と「地域研究」ということでやろうということになりました。学際的地域基幹大学と自称しているだけでなく、地域に基礎を置きながら新潟大学として世界にはばたいていこうという、とにかくジャンピングボードとして地域をとらえておりますので、こういう科目をやっぱり大学教育の中で、その根幹に座る科目として教育していく必要があるのではないか、ということで設けたものです。この個性化科目のアイデアは、センターの専任教員との検討の中で出されてきたものでした。

なお6番目に、留学生向けにも基本科目を設けていま

す。

これらは、概して入学した第1年次において、できるだけそれも第1セメスターのほうでやるべき科目というふうに問題を投げかけていた科目です。

そして、第二に、各8系列の中から共通基礎として出された科目以外の科目は、展開科目という名称を持つことによって8つの科目群名を引き継ぐということになりますが、共通基礎に対して、並行・上位の履修順位があるものとなります。

それから、各学部で今、学力補正等で進められている補正科目は、基本科目として、今後これを全学的に設けていくことが避けられない状況が予想され、これをすみやかに検討していく必要があるだろうというわけであります。

これはどういうことか、今少し申しますと、高大接続の問題でもございます。しかし、それと同時に学生がやはり段階を追ってどう学んでいくのかということでは、あるところまで来れば学生の選択と、それからアドバイザーとの相談などで自由に科目が学んでいけるというふうになっていくのが、本学がめざす将来方向ということになるわけです。しかし、まず入学したときに、学ぶことを通じまして、達成感なり、大学における学びの楽しみ、そういうことをスキルの面から身につける。そういう必要があるだろうということで、共通基礎という形でカリキュラムの基底に置いておく必要があるとしたわけです。

従って展開科目群というのは何かというと、これは専門科目を学びながら、専門がどういう意味を持つものをより広い視野から位置づけて、学ぶ目的を明確にしつつ学ぶ。教養科目と専門科目を本当に有機的関係において学んでいくんだというものになるわけです。

御承知のように、教養部時代は、1年次ないしは2年次、この間で学ぶものである、いわば教養科目を低年次で学ぶ科目だとして、その持つ問題の発展性よりも、低年次性において理解を余儀なくさせたと思うんです。教養科目を低年次性だという形にしたことによって、学生たちは、パンキョウ、パンキョウと言ったりしました。早くそういう名称と決別してほしい、というのが大学教育委員会の議論にもあったわけです。

それで、同時に大学の授業を全体としてどう改革して

いくのかという、そういう見地からいいますと、教養科目という限られた意味ではなくて、全学で力をあわせて全学の学生相手に授業をやっていく。こういうのを全学共通科目と呼んで、各学部にお任せされている専門科目とは違う、同時に専門科目といつも対になって学ぶことによって人間形成や専門的な力も同時についていく、また創造性もついていく、そういう科目にしていく必要があるだろうと、そんな位置づけを与えて科目区分をした点がミソであります。

むしろ教養部時代に文部省主導で設けられた科目区分に含まれているディシプリンの学問分野、これらを尊重していくということ自身は展開科目の中にきちっと継承しているつもりです。

そして、高大接続を含め、自分で学ぶことを原則にしたスキルを身につけていく。そして英語を学ぶんじゃないくて、英語で学ぶという、コミュニケーション能力というものをきちっと身につける。そして、スポーツにしても、自分の身体から自分を知るという意味づけを持ったスポーツ科目にもっていく。さらにその中の一つに新潟大学の個性化科目を立てて、そして豊かな地域のこれまでのさまざまな工夫や、経験、高等教育に必要と見られる地域の教育力を引き出して、新しい授業科目を立てる。

もう一度申しますと、共通基礎科目があって、展開科目がある。わきに専門科目がずっと横並びになるという構造の二階建てなんです。学んでいく序列といいますか、段階としては一応2段階型なんです。そこにこれから新しい教育課程で2002年からは小中学校で総合科目が入ってくる。2003年から高等学校でやるということですが、その高校の3年を卒業した諸君が、やはり時間数の少ない中で、微分や積分も学ぶ義務のないものとして入ってくる。そういう諸君たちのために、今からリメディアル科目を全学的に立てていかざるを得ないだろうと、こういう見通しをもっています。そういうのは何なのかというと、私はまだ玄関に入る下の車庫か、建物に例えると土台に当たるんじゃないかと思うんですね。今はそれがほんのわずかで済んでいた、あるいは一部の学部だけで済んでいるが、それでは済まなくなる。その部分をどうとらえるかということ、雪の深い地域に行きますと、克雪住宅というのがございますよね。あの住宅の特色というのは土台が随分高いんです。玄関に入るま

で、雪の降っていないときは、道路からトントんと階段を結構昇らなきゃいけないですね。

そういう意味で、リメディアルの基本科目は、どのように考えておくかが重要です。今までのリメディアルの科目を担当してこられた学部の調査結果などを拝見いたしますと、やはり単位でないのは学生の履修には差し支えがあると指摘されていますが、やはり単位化することも考えてみなきゃいけない。例えば、学部によって違いますけれども、今124単位で、最低限を設けていますけれども、これを136にするなどです。そしてセンター試験や、資格検定試験を含め、彼はその点は履修してきた。これはできると認めたときは、12単位ぐらいはあるとみなして出発させるというようなことも検討が必要になっているんじゃないか。これは避けられないということを出しています。

これから先のカリキュラムも考慮した上で、平成14年度から行う改革カリキュラムというのは、先を読んだ構成にはしているものです。以前からの継承関係と、今抱えている問題と、そして将来への展望、余りいい展望ではないんですけども、そういうのを組み入れているということになっていると思っています。

もう一点、この改革カリキュラムが持つ問題というのは、長期にわたっては、どういう方向に向いているのかということを中心に申し上げたいと思います。

それは、レジュメの3といたしました改革カリキュラムに連結する課題ということでまいりますと、英語教育の改革を考えて、きょう別途、福田先生のほうから御報告がありますけれども、改革上級英語を基盤にリベラルアーツの構想を考えようではないかということであり、全体としては改革カリキュラムを、やはりリベラルアーツの方向に向かって牽引する。私はまだ改革カリキュラムがリベラルアーツだというふうにはむしろ思っています。リベラルアーツに向かう素地を作る改革を図っていることになるだろうと思っています。

そんなわけで、話の前提になりますことを申し上げてきて、最後に結論めいたことになります。

個性化科目「地域入門」「地域研究」

新潟大学の理念の一翼ともなっています「地域」につ

きまして、地域に学ぶ素養を身につけるということを目的に、新潟大学の個性化科目としまして、「地域入門」と「地域研究」を全員履修可能科目として共通基礎科目に設けることを決めてもらっています。

「地域入門」のほうは100人クラスで20科目は立てたいと考えております。これは、従来の科目の中で転換可能な科目を各分野でご検討、ご準備いただいて、大胆に転換を図っていただきたい、とお願いしています。

それから、「地域研究」のほうですが、50人クラスで、先生方にはコーディネーターになっていただいて、先生方のお力で、地域における教育力をお持ちの方を非常勤講師をお願いするなどしまして、必要とあらば学生をバスに乗せて現地に連れていったりする授業を設計していただくといった内容を想定しております。なお具体的な点を詰める必要があると思いますけれども、大筋そういう方向で、これを10クラス設けます。以上、あわせると2,500人分となります。新入生全員の履修が可能になるように御検討いただいているところであります。時間の都合でこの細部に十分立ち入れなくて申しわけありませんが、この点は後で御質問に答えるような形でお話をさせていただけたら幸いに思います。

最後に、先般、放送大学と単位の互換協定を結びましたが、当面は放送大学の単位を新潟大学の学生が取りにいくということになります、が、いずれ互換になってまいります。何も放送大学とだけやるつもりではありません。放送大学はもちろん手始めでありますけれども、これはやはり地域の幾つかの大学ともこれから連携を図って、例えば既に人文学部で、敬和学園等々と、そのお話を進められたということでもありますので、これからどんどん進めなきゃならない。その場合、こういうカリキュラムが、各学部、専門教育にとっても非常に有意義なものであると考えております。専門を学びながら教養科目を学んでいく、入学時の学力不足を何とかする、1年次から勉強する力を大いにつけて、大学で楽しさをまず見つけさせるために最初にきちっとしようじゃないか、という考え方で14年度改革カリキュラムを設計していることを申し添えまして、個性化科目の「地域入門」、「地域研究」を新設していく意義をご理解いただいて、私の話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

質疑・討論

★司会

ありがとうございました。

問題の所在、経緯等、あと新カリキュラムの核心についてお話があったわけですが、多分、新カリキュラムになりますと、相当今までの教養科目とは姿と形が変わるんですが、大きくは共通基礎と展開科目というふうに区分けをしまして、共通基礎のところではスキルを重視してやっていくんだということだと思えます。展開科目については、これまでしばしば言われてきた専門科目との接続がうまく行かないというところについて工夫を凝らしたということです。

もう一つ、センター長の話の中で大きな核としては、個性化科目というところで、新潟大学の全学共通科目の共通基礎科目として特色を出していこうというあたりがあったと思います。

予定として二、三十分間質疑応答ができればと思いますので、具体的な実施上の問題も含めて何かありましたらお願いいたします。

★小林

肝心なところをはしょってしまって、御質問が出にくくなっているかと思うので、地域入門と、それから地域研究という授業科目についてちょっと御説明させていただきたいと思います。地域研究のほうは、100名規模でやらざるを得ないと。これはちょっと不本意なわけですね。もう少し少ない人数でやるようにすべきだろうという意見が出てきたりしても当然だと思うんです。

しかしながら、大所帯でありまして、1学年2,500ということになりますと、どうしてもそのあたりで稼いで、2,000人分ぐらいの数は出しておかなきゃいけないと。そこを担当される先生は、今までそんなことしたことないのというような方も、せがまれてやむを得ず腹を切るなんてことになりかねないのではないかと思います。むしろ地域研究のほうでちょっと考えていることについて実施委員会で検討したレベルのことをお話したほうが議論がしやすいのかなと思います。

それは50人規模で当面やってみたらどうかという点についてです。大型バスをチャーターして、教室内の学

習だけでなく、教室外の学習をも可能にする。午前中のお話では、教室内外と言ったときに、学生自身が自分できちんと調べて、自分の課題に沿ってやってくると。これが一つ求められる点でありますけれども、何しろ地域ということになりますと、地域にやっぱりさまざまないろんな経験を持っている方がおられます。ささやかな実践ということではありますが、大変な努力をされて、センターの加藤かおり先生が、新潟祭りという授業をなさいました。そこには新潟市の商工会議所をはじめとしたさまざまな人たちが入れかわり講義にやってこられました。同時に新潟祭りの実行委員会の会議の席等にも学生がオブザーバーということで参加させていただいたり、当日の祭りに参加し、体験し、その上で検討し、レポートにする、そういう取り組みをしているわけですね。

例えば県立の博物館が、どのような対象で何を心がけて、どんなことをやっているのか。例えばそういうものの中で、彼らが地域の特色をどうとらえて、それをどう展示やその他で生かそうとしているのか、について身をもってなさっている人たちとともに考えていくようなことをコーディネートしてくれる先生がいらっしゃると、これは一つのいい授業になるのではないかと。

あるいはまた、三条・燕といいますが、金物の産地であります。こういったところで業者団体がございまして、あそこにおけるさまざまな開発や、そして市場の問題や、経営の問題などについて、さまざまな角度からいろいろと取り組まれているはずですね。そこには伝統産業の伝統という問題があったりするわけですね。例えばコーディネートしてくれる先生がいて、そこの方々と打ち合わせをするなどして、一つの授業を組み立てて、実際にはそういう現場や工場などに行き、その様子を見たり、あるいは実体験をしたりできるということも、ありそうなんです。例えばそういう実体験をしながら、地域の持っている生き生きとした現実の中からさまざまなものを学ぶ。そういうものの初歩、そういうものに興味がわき、そこに目を向けるということをする、そして実はそこに豊かな教育力や、研究のアイデアやテーマが潜んでいるのではないかと考えられます。

委員会では、地域とは新潟のことですか、という質問が出ていますが、それほど狭く限る必要はないのです。地域は、やはり世界にあって、世界との比較もあり

ますし、環日本海とか、さまざまなレベルのとらえ方があります。それは問題によるのではないかと話し合っております。そうした新しい試みを、現場といいますか、地域との接点になってくれるコーディネーターの先生方を、8系列の系列会議の中で募っていただいて、取り組んでいただくと大変いいのではないのでしょうか。

来年度はもうその初年度ですから、先ほどの午前中のお話でありましたように、1年目は失敗したほうがいいというお話もありまして、私なりに心強く思っているんですが、そのことから学ぶことが大きいはずだということで、2年目は大成功間違いなしというふうに進めるというかなと思っています。これら具体的な点、あるいはその位置づけの点、ご論議いただくとありがたいと思います。

★田邊

工学部の田邊と申しますけれども、ちょっと二、三質問させていただければと思います。今、お話にありました個性化科目で、地域入門、地域研究ということなんですが、7月の段階で各学部で依頼が来たときには、たしか各学部から提供できる科目、あるいはこういう科目を改正してほしいというものがあつたら出してくださいという話だったんですけれども、途中いろいろ変遷があつたようで、地域入門、地域研究という形に名前がそうなつたようですが、具体的に科目を誰が開設するのか。7月の段階と同じように、ただ単に、例えば工学部から希望を出せば、そういうものを開設していただけるのか。あるいは新たに開設してくださいということでお願いが来るのか。その辺がちょっとよくわからないものですから、一体誰が具体的にこの科目を開設するのかというのが1点。

それから、これに関してコーディネーターというお話で、たしか各学部から募られるということなんですけれども、先日ちょっとコーディネーターの話が来るだろうということで、学部の中でお話はしました。その中でやはりコーディネーターという役割の具体像が見えない。言ってみれば、例えばバスなんかを使って外に行く場合には、ツアーコンダクターみたいなことをやるのかと。だから、その辺もちょっとまだ具体像が見えないので、もっとはっきりした、こういうことですよという説明があれば、お聞かせいただければと思います。

3番目なんですけれども、これはこの場でふさわいかわかりませんが、平成14年度から例えば全学共通科目が導入された場合に、今は教養科目ということですけれども、これと並行して学務の電算化という話が進んでいるかと思います。そうしますと、例えば読みかえ科目とか、あるいは工学部ですとキャップ制に絡んできめ細かい履修指導をやっている関係上、成績が優秀な学生に対しては、こういう科目はキャップ制を超えて取っていいですよというような指導をしているわけです。ところが、科目が変わってしまいますと、新しくおこす科目というのが、従来の取っていいと言われている科目のどの部分に相当するのか。全部工学部の規定とか細則を見直さなきゃいけないということになるわけです。だから、そういう点も含めて、学務電算化とあわせて、読みかえ科目みたいなものをちゃんと考えられているのかどうか。その辺をちょっとお聞きしたいと思います。

★小林

1番目に、これらの科目の実施主体はどうなるのか。現在この科目が成立していないこともありまして、手順の関係からかなり後手に回っているんですね。後手に回っているんですが、それで、今できるだけ情報リテラシーのように、こちら側としては授業を立てて、そして位置づけはこのようであるということで、各学部で、これは御判断、御決断いただかざるを得ないと思います。

それで、10月18日の実施委員会までに、そういう科目が幾つ、このように立ちますというここをはっきりさせないといけないんですね。それで、10月10日までに各系列のほうに、転換できる科目、それから分野における先生方でコーディネーターをなさってくださる科目の内容について照会を差し上げているところです。

それで、実施主体はどうなるのかということで、なお今後の検討が残っておりまして、そういうことになりましたと、実施主体として1つの系列を立てなきゃいけないだろうと考えております。スタディ・スキルズと呼んできました大学学習法のこともあります。新設科目に関する実施主体の系列を立てて、そこで具体的に詰めるべきことを詰めていただくということをせざるを得ないだろうと考えているところです。

それから、コーディネーターというのは、やはり授業のコーディネーターでありまして、その中で授業目的だ

とかさまざまな点でコーディネーターがイニシアティブを取らなきゃいけないということだと思うんです。それから、講師の方をどういう形でお願いして、どういう方々に、どういう内容で、どういう順番でやっていただくかということも、ある意味で全責任はコーディネーターの方によらざるを得ないだろうと思います。決してパスの案内だけではないのでありまして、それで大変な役割だなと思うわけです。

今までだって総合科目で、オムニバスでやったときに、オムニバスでそのときそのときの先生任せでやっているということもございましたけれども、そうはいかなくて、やはり責任者が果たすべき役割というのがますます重くなってきていると思うので、そういう意味でのコーディネーターでございます。

それから、読みかえ等は、当然工学部規定も、どこの学部の規定も、これを改正しなきゃならないだろうと存じます。そのことについては、改正したらいかがですかということが決まりましたら、事務方でもって改正すべき点をあげていただくように、つまり各学部が取り組みやすいように提示したいと事務方とは話し合っております。なお電算化と絡んでというのは、私もちょっとわかりにくいんですが、読みかえにするかどうかとか、全学的にそういうことにするかどうかは、まだそこはちょっと踏み込めていないですね。学部が、これをどういうふうに位置づけて、自分のところではこの授業をこういうふうに進めていくんだという、その辺がまだ出ていないのですね。

そういうことで、昨年7月に大学教育委員会の方針が出たんですけれども、それを具体化していく中で、学部の対応が、私からするとおくられている。去年8月から申し上げているのに、どうするかというようなことがわからないということもあるかもしれませんが、こちらの議論がおくれたこともあります。その辺が何かちょっとまだ肅々と進むという状態では全くありません。そういうことで御迷惑かけています点をおわび申し上げます。

★司会

ほかにありますか。

★佐藤

工学部の佐藤と申しますが、最初のほうのお話に対す

る質問というか、コメントというか、そういうことになると思います。

今回、共通基礎科目と展開科目、そして基本科目というふうにお分けになられたのは、多分我々工学部などで専門を教えている者にとりましては、いわゆる教養で教えていただくのは、専門への基礎になるようなもの、工学系では数学とか物理とか、そういった基礎的なものと、それからやはりエンジニアとして、研究者として出ている後に一般素養として知っておくべき社会科学的な、人文科学的な、または英語とか、そういった語学というようなもの、それをどういう順番で学んでいくかということで、今回共通基礎科目と展開科目などをつくられたんだと思いますので、それは今後いつどれを学ぶかということのをうまく考えていければいいのではないかと思います、お話を伺いました。

特に工学部では工業高校とか専門高校からの学生を受け入れて、その補習教育などのコーディネーターなどをしたものですから、そういったものをどういうふうに入れていくのかということも今回今後の課題として提起されているというのはよくわかったわけなんです。じゃあすぐに14年度からこの中の基本科目に相当するものをどのように入れていったらいいのか。特に、多分これは法律的なものもあるのかもしれませんが、高校で学んだものを大学の単位として認められるのかどうかは、随分工学部の中でも議論いたしました。今回おっしゃっておられるのは、外部の資格試験などを取ったものは、大学のほうで単位の認定はできる、または積極的にもう既に英語などでなさっているわけですが、専門高校だから、工業高校だから、工業の科目は認定していいのかどうかとか、そういったものをどこで誰が判断できるのか。大学の中で積極的に、例えば工学部で認めれば、それで判断できるようになるのか。そういう法律的なものも我々は疎いものですから、今まで議論の中で、結局事務方のほうにお聞きして、高校でやったものは認められない、工業高等専門学校で取ったものであれば単位を認められるという程度の理解しかありません。今後これは専門高校だけでなく、当然普通高校からも物理の教科の中で全然学んでいないものを、まさにかさ上げのための授業科目としてなさるということなんです。それをじゃあ今後卒業までの席次などを決めるときの

評価において、そういう簡単な科目を取ったものをどう評価するかとか、問題が山積みになっているんじゃないかと思うんです。今後の課題としてはあげられたんですが、その具体策がなかなか私どものほうにイメージがわいてこないものですから、今後どういう方向で進めていって、どこに我々が参加してそういった議論をすれば、今、補習教育としてやっているものを実際に単位を与える科目として、そしてほかの学生にも不公平なく席次などを出せる科目として認定していけるのか、もしお考えがあったらお聞かせいただきたいんですが。

★小林

Ⅲで基本科目としているものは、2006年に新しい課程の高校卒業生たちが来る1年前に、ある種の試行ということとはしておく必要があるだろうと思います。そうすると、2005年の4月には、かなりなものとして実施できるようにしておく必要がある。タイムリミットはその辺かなというふうに考えているところです。

既に工学部、農学部、理学部、あるいは最近、経済では数学を行っているようですが、各学部がすでに経験をしてきているものですから、これはやはりしかるべき委員会をつくりまして、Ⅲの基本科目を全学的にどうするのかという細部は、そこで議論して決めていかなきゃならないだろうと考えています。

ただ、今ほど御質問があったように、それをする際には、それぞれの分野において、英語にしろ、国語にしろ、社会にしろ、やはり相当にこれまでと違い内容がかなりドロップしてこざるを得ない。そういうドロップした下で、大学教育はこれでできるんですかという、こういう研究と検討が必要なんですね。これを早くしなきゃいけないということだけは確かなんです。そういうものが一方であって、そして委員会にその材料も提供されて審議が行われる必要がある。その意思形成が2004年度中にしておかないと、2005年度の施行はできないというタイムスケジュールの中にあるというふうに思っているところです。ですから、これはまだ全体のカリキュラムの展開の位置づけ、つまり、こういうことも位置づけて、これから新潟大学ではやっていかなきゃいけないんです、ということを宣言している程度にとどまっているんですね。

ただ、各学部でなさっているものの経験の一端は報告

書も出たりしてますから、承知してないわけではございません。そうすると、例えば土台に当たる部分は、上の階と違いますから、おのずから性質の違う12単位だったら12単位の理解というふうになるんじゃないか、と考えられるんですね。それが果たして12が適当かとか、全く例に過ぎません。そんなことで本日のレベルはよろしいですか。これは課題提起であるというふうに御理解いただけたらと存じます。

★司会

ほかにありますでしょうか。

★小林

ちょっと今のことに関連しまして、理系だけでなく文系もそうなんですけれども、大体最近のいろいろと学力問題の根底にあるのは、やっぱり学生における学習力の形成をどうするのか、ということだと思います。午前中にも質問が出たように、総合科目への期待だとかいうものも学習力の未成熟から出てくるんですね。

けれども、学ぶ時間数がかなり少なくなっているということで、大学教育がそれに無策で追随すると地盤沈下を起こすんですね。やっぱり沈んできているわけですから、かさ上げしておかないともたない。ここの単純な道理なんですね。

そのときに、やっぱり学ぶ動機だとか、学ぶ意欲だとか、学習する側の元気といいますか、こういうものを引き出すような仕組み、装置を考えていかなきゃならないのではないかということが、土台の話としてあるということです。

★出席者

そういう意味では、工業高校からの学生諸君の場合、動機づけがうまく行っている学生の場合には大学に入ってから成績も決して劣るものではなく、席次などで評価して1番という学生もいたりしています。

結局、専門のような教育を動機づけとして使う場合に、いつそれを勉強したら、その後一般教育、ゼネラル教育的なものを楽しんでもう一度勉強できるのか。私なんかの経験では、大学院に入ってからもう一度教養の授業を聞きにいったりすると非常におもしろかったと。ところが、教養で勉強しているときにはそれが苦痛になっているというのが今回の1、2、3に分類にされている皆様の共通認識なのかなとも思うんです。実は2005年では正

直遅いと思っております。今、普通高校でも明らかに聴講科目の差が出ておりますので、いかに早くしなければならぬかというのが専門高校出身者の授業を担当しての実感です。なるべく時期的に早い時点でやらなければならないのと、また学生の勉学の流れの中でも少し早い時点でほんのわずかだけ専門を勉強をさせた上で、再び一般的なものを勉強させているような流れとの関係で、ぜひ少し全学的な議論になればと思っています。

★小林

ありがとうございます。

今の御発言のような声が、やはり力になるんだと思うんですね。私も急がなきゃいけないというふうに思っているんですけど、いつも実施委員会の委員長だけが言うというのでは気合いが入らないのでありまして、そういう声が出てきて、そして各学部に広がることを期待するんです。それを起こすためにも、今回変わっていこうとする高等学校までの新教育課程というものの中身を承知しなきゃいけない。それがもたらすことがどういう問題を起こすかということも承知しなきゃならない。具体的に余り提起されていませんので、むしろ予備校あたりから出てくる情報のほうで、そういう事態がわかってくるというような程度であります。やっぱり大学の側でイニシアティブをとって明らかにしなきゃいけないというふうに思ってます。そんなことで、急がれるということは承知いたしました。

★司会

よろしいですか。

続きまして人文学部の福田先生から、新潟大学における英語教育改革の現状について。

福田先生、お願いします。

★福田

人文学部の福田でございます。

コンピュータのパワーポイントとか、こういうふうなもの、私は使いませんので、皆さんにこういうレジュメ、ハンドアウトをお配りしてあります。ハンドアウトの新潟大学における英語教育改革の現状というものです。持ち時間30分ということで、2時40分ぐらいまで少しお話ししたいと思います。

まず教養部廃止というのが1994年、平成6年ですが、それまでは皆様よく御存知のように、新潟大学の英語は

甲英語、乙英語という名前で、そして1年通じて1年のときに4単位、2年のときに4単位、つまり英語だけで2年間で8単位必修であったわけです。それに初習の外国語も同じように8単位必修だったから、8・8体制と言われるものでしたが、教養部の廃止転換に伴って英語ⅠA、ⅠB、英語ⅡA、ⅡB、英語Ⅲというふうに名称も変わって、内容も変わっていきました。

英語Ⅰというのは講読、ⅠBというのはコミュニケーションの英語ということで、Aというのが講読科目で、Bがコミュニケーションの科目です。そのようにしながら、英語教育実施のブロック制というのが始まりまして、御存知のように人文ブロック、法ブロック、経済ブロックというふうに、どの学部もどれかのブロックに入っていたわけです。理・工学部であれば人文ブロックというふうに、医歯系であれば法ブロックというふうにブロックの中におさまっていたわけで、企画も実施も全部ブロックで責任を持つという形でやってきました。

その間、外国語は大石強先生や金子一郎先生と、主査はかわってきまして、現在私がそれを担当しているんですが、その間に、例えばそこに並べましたように、つまり英語教育も何もしないでずっと来たわけじゃなくて、人文ブロックなどを中心として、このような改革が行われてきました。

文献英語、例えば1年生のときから心理学の先生が心理学の基礎文献を読むというのがあったり、講義英語、これはレクチャー・イン・イングリッシュというもので、日本人の先生やネイティブの先生が、そこに書いてあるようなタイトルで、要するに英語で講義をする。この単位は教養の講義科目だったり、あるいは英語であったりして、講義科目か英語かのいずれかの単位として取れるものであるわけで、現在もやっております。

ⅠBの中のコンピュータ英語、これは理工系を中心に、アメリカで開発されましたクイック・イングリッシュというのをを使って、それが週2回、1期は週2回ですね。2期はネイティブにかわる。そのような年間通じて4単位というようなものもやってきました。

人文ブロックでは夏期集中英語というものも現在やっていますが、夏休み中にネイティブで2週間で2単位取れる。これは非常に人気があります。

基礎英語というものも理工系を対象に現在やっており

ますが、先ほど工学部の佐藤先生が言われたような専門
高校出身者を中心として、英語が苦手な学生には基礎英
語という授業をやっているわけです。農学部の方では農
業高校出身の学生のために、何かいい方法がないだろ
うかと考えておられることを最近知ったんですが、基礎
英語のような形のものをこれから開設していくのも一
つの方法だと思っています。

以上は人文ブロック中心の改革でしたが、医学部保健
学科の入門医療英語、こういうのは全くブロック制とは
別の独自の改革であるわけですね。この医学部保健学科
は、もともと医療短期大学でしたから、ブロック制とは
別個に進んできたもので、こういう入門医療英語という
のは、保健学科の英語の先生が中心になって、ブロック
にとらわれずやってきたものです。これは、いわゆる特
別目的のための英語（ESP）とか、学問目的のための
英語（EAP）、そういうふうなカテゴリーに入るもの
だと思います。

このようなことをやってきましたが、何年か前に、要
するに英語は力がついたか、つかなかったかとか、そう
いうアンケートを理学部で取られたと聞いていますが、
なかなかいつまでたっても力はつかないし、高校のとき
よりも下がったというふうなアンケート結果が出たと
聞いています。その他、専門の授業の外書講読などで、
ますます英語の力が落ちているというようなことをと
きどき耳にしまして、なかなか英語の力をつけるのは難
しいものなんだと考えさせられるところです。

ただ、私個人としては、私も英語の授業を幾つか担当
していますが、なぜか工学部の学生を教えることが多い
んですが、私は、主観的にはそんなに力が落ちたとか意
欲がないとか思わないんです。非常によく勉強する学生
もふえてきているという感じなんです。

ただ、学習の動機づけというのが非常に弱い。大学に
入ってきて何で英語を勉強しているんだというのが何
かぼんやりとしかわかっていない感じです。それから、
高等学校までの英語と何が違うんだという感じで見て
いるようですね。

そういうふうな状況の中で、きょうも出席されていま
すが、人文学部の金子一郎先生が委員長を務められまし
た、皆様よく御存知の「新潟大学における英語教育改善
のために—外国語教育改善特別検討委員会中間報告」と

いうのが、ことしの3月に出されました。私もここに持
っていますが、こういう表紙つきの「中間報告」です。
この「中間報告」の内容は、各学部の教授会等でも話題
になったと思うんですが、今私があえて幾つかまとめま
すと、金子委員長の委員会の中間報告は、まず新潟大学
における英語教育の目標設定、そのために教養英語とい
うコンセプトを廃止して、それに代わる大学英語、カレ
ッジ・イングリッシュとか、ユニバーシティー・イ
ングリッシュとか、そういうコンセプトを考えます。
そして、その次が一番議論になって、あしたも工学部に
4時20分からおじゃましますが、実施責任の明確化、つ
まり各学部と英語学系とが共同分担で実施責任を持と
うということを新たに提案しています。つまりブロック
制の廃止ということですから、協力学部制というふう
に変わっていきます。どうしたらいいのかということで、
かなり同意はできてきているものの、まだ整理がついて
いない学部もあるかと思いますが、教養英語から大学英
語へ、そして実施責任の明確化、これらがポイントだと
思います。

なぜ従来のブロック制がだめなのかということが一
つ大きなこととしてあるわけですが、ブロック制という
のは、教養部の英語科を引き継いだような、英語のこ
とは英語の先生に任せておけばいいという発想で、教養英
語というものと、学部での英語教育というものが、あ
まりリンクがないということ。それでもって学生たちは
教養英語は高等学校の延長のようなもので、早くそれが
終わってしまっ、専門に行ったらもっと専門的な勉強が
できるというふうになってきたことは否めないと思
います。

それで、「中間報告」では、英語ⅠAとⅠB、英語の
授業というのは1学期、2学期全部あわせまして360コ
マほど開いているわけですが、その中で中・上級英語が
年間通じて44コマあるわけです。300幾らかのⅠA、Ⅰ
Bというのが年間あるんですが、それを各学部に配分し
まして、そしてそれに基づいて各学部で、できれば外国
語教育委員会というものをつくっていただいて、そこで
ⅠA、ⅠBのコマ数を基礎として、学部の4年間一貫教
育の中の英語教育というものを考えていただきたいと
いうのが「中間報告」の主張です。

このときに一番大事だと思いますのは、学部に任され

た、すわ一大事、大変だというふうにお考えになるのじゃなくて、英語の教師がいない学部では、協力学部というのが「中間報告」にも載っているわけですが、その英語の教員を十分活用していただきたい。例えば学部の外国語教育委員会か、あるいは企画委員会ができれば、必要とあれば英語の専門家というか、教師を一、二名そこに呼んでいただいて、そこで一緒に話をさせていただく。そういうふうにして進んでいきたいと思っているわけです。

そしてもう一つ大事なことは、学部任された I A、I B の相当コマというものの授業の中身なんですが、学部の裁量にすべて任せられると思います。つまり全部で何コマかある英語 I A、I B のコマの中で、「中間報告」が提案している専門英語と言われるものと、コミュニケーション英語と言われるものの両方をつくってほしいということです。各学部での専門英語とコミュニケーション英語というのはどういうことを意味するのかと言いますと、専門英語は何らかの形でその学部の学問分野に多かれ少なかれ関係のあるような英語の授業内容にできたらということです。一方、コミュニケーション英語のほうは、そういう分野から離れた一般的なコミュニケーションの基礎です。

大切なことは、この割合を五分五分とするか、専門英語と言われるものを 2 割にしてコミュニケーション英語を 8 割にするか、その逆にするかはすべて学部の外国語教育委員会の裁量ということになってまいりますので、専門直結の英語は少なくてよいと思われる学部がありましたら、それは 2 割ぐらいにとどめたり、3 割にとどめたりすることも可能だと思うんです。そして、その辺は柔軟にお考えになって、例えば教養英語というコンセプトを廃止したとするならば、学部でやっておられる原書講読も 4 年間一貫の学部英語教育の中に位置づけることだってできると思います。ただし、規定上、教養の卒業要件単位にできるかどうかの問題は残りますが。

では、英語学系は何をするかという、英語学系は、一般的にコミュニケーションと言われる英語に専念して、全学向けに学部指定なしで授業を出したいと考えています。一般的なコミュニケーションというカテゴリーでの中・上級英語の中に、本当に一般的なコミュニケーションと、それから一般的な学問英語(一般的な E A P)

といえますか、そういうものを入れていきたい。つまりコミュニケーション英語の中に、日常生活でコミュニケーションできるクラスと、大学生活を送るときに必要なコミュニケーション英語という 2 種類を考えて出していこう、そういうふう考えています。

これからの全学向け中・上級英語の開設という第 3 番目のところに移っていくわけですが、その前に、今朝池田輝政先生がお話しになった時、経済学部の西山先生が、外国語の運用能力って何だ、どうすれば外国語の運用能力がつくんだと、質問されましたが、私が思いますのは、私たちの学生時代を振り返りましても、高校時代の英語能力というのは、ちょっとあやふやなものだと。振り返ってみればそう大したことはありません。大学の教養で習う英語も、何か読んでいたなというふうなぐらいで、そんなに我々の英語力をがっちりつけるものではなかった。

しかし、何らかの形で私たちの研究分野や専門分野に結びついたとき、平たく言いますと卒業論文のために英文の論文を読んだとき、あるいは卒業論文がたまたま英語で書かなくてはいけなから一生懸命やったとかいう、何らかの形で自分の勉強と結びついたときに、その運用能力というものがつく。つまり非常に強い動機づけが生まれる。そういうふうには私は信じているんです。

だから、いかにして高校英語と差異化するかといいますと、やっぱり高校生は大学に入ったんだから、ちょっとでもいいから自分の学部の専門に触れるようなものを学びたい。最初そう思うと思うんです。後になって教養というのもいいもんだなというふうになる人もいるかも知れませんが、まず大学に入ったら、例えば、医学部に入ったら何となく医学的なもの、工学部に入ったら何となくテクノロジー的なものに触れたい。そのような段階の 1 年生にいわゆる基礎的な専門英語というものを各学部で立てることには大きな意義がある。そう考えているんです。

各学部企画の専門英語とは別の全学向け中・上級英語というものを、ハンドアウトの下に記載した委員の間で 1 カ月ぐらい連続 6 回の会合をもって次のように決めました。まず、全学向け上級英語、中級英語というのは、土台となる出発点のコマ数は、現行の英語 II A、II B、III、全部あわせた 1 期 22 単位、2 期 22 単位で計 44 単位。

それを出発点として、しかしながらそれに1期につき10コマぐらいコマ数をふやす形で設定いたしました。その理由については、後で申し上げますが、まず中・上級英語の3つのタイプは、どの学部何年生の学生でも受けられるということに注目してほしいのです。一応、中級は2年生、上級は3年生、何も指定がなければ2、3年生と、便宜上、学年をふってありますが、1年生でも4年生でも、はたまた先生方や事務職員の方々も受け得る、そういうふうな授業として考えているわけです。

まず一般目的英語、あらゆる一般的なことに対応できる一般目的英語（English for General Purposes=E G P）、この中級を16コマ。これは1期の話です。1つの学期につきですが、中級E G Pを16コマ、上級E G Pを8コマ、計24コマを開きます。

2番目に学問目的英語（English for Academic Purposes=E A P）と呼ばれるものですが、これは中・上級に分けずに2、3年生優先で、各セメスターに4コマ。

3番目にちょっと珍しい名前が出てきますが、主題別英語（English for Topics and Themes=E T T）、これを各セメスターに4コマというふうに考えています。

E G Pが一般的なコミュニケーション、E A Pが海外の大学や大学院などで学ぶのに対応できるようなレベルと内容、そして主題別英語のほうは、非常に総合的な、つまり先ほど小林先生が言われたようなリベラルアーツに関連する可能性があります。各セメスターというのは、1期ということですが、1期で32コマ。現状の英語II、IIIは1期で22コマですから、1期につき10コマ分をふやしてあります。中・上級英語は、1期はIという表示がついています。2期はIIがついていますが、レベル差はありません。

現在やっている英語II、IIIを考えてみますと、現在の英語II A、II B、IIIというものは、1期22コマで収容定員は780名です。しかし、780名の収容定員の中で、現在の2年生、3年生がどれだけ受講しているかというと、352名です。定員の半数弱しか受けていない。実に嘆かわしい状況です。

なぜ嘆かわしいかと言いますと、2つの側面があって、1つは英語II Aというのは、何と50人定員です。中級英語のII Aを50人の定員で開いていること自体がおかし

いのです。

しかしながら、定員が多いという問題点はあるんですが、一方で受ける側にも問題点があります。それはもう2年生になったら英語とおさらばだ、3年生になったら英語とおさらばだ。各学部で原書講読をやられていると思うんですが、一方で、教養で開いている英語とおさらばする学生が多いと思うんです。

新潟大学全体の学生の英語の力を本当に考えるならば、中・上級の英語クラスの充実というものは非常に重要だと思われますので、現状ではチャレンジする学生が、そのようにいまひとつ少ないんですが、クラスの内容を刷新して、中・上級英語に学生を集めたいとむしろ考えています。

例えばE G PとE A Pの特徴を申し上げますと、スキル別です。これは随分議論しました。このようにスキル別に考えて、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングというふうな分け方がいいのかどうか。例えばリスニングのクラスだったら、英語を聞いてばかりいるのかという問題があるわけですが、このようにスキルを明確にして、それを最終ターゲットにしながらもまわりにさまざまな教材を配置することが可能です。非常に目的がはっきりしているという点が評価できます。このようなクラスのためには、レベルの高い適当な教科書がオクスフォードやケンブリッジから出ています。そのような推薦図書を講師に使ってもらうことによって、ある意味でどの教師が教えても、（ネイティブが中心になりますが）一定レベルの教育ができるようになります。

3番目のE T Tですが、「ドラマと映画」、それから、「ディベート」。そして「多文化理解」というのがあります。英語というのはさまざまな英語が世界中にあるわけですが、そういうものに触れる機会を持つためのクラスです。「公的英語検定」、これは英検、TOEFL、TOEICなどに対応できるようなクラス、こういうふうなものを考えています。このE T Tは、ほかにドメスティック・バイオレンスとか、セクシャル・ハラスメントとか、いろんなテーマを考えてみたのですが、一方で新潟大学には「短プロ」（短期留学生プログラム）というものがあっていて、そこではで自然と環境とか、そういうことを全部英語で講義されるわけですね。これとの重複というものを意識しまして、E T T用に、ここに

並べたトピックをえらびました。

ハンドアウトの方、ずっと飛びまして、改革検討委員会での合意事項というのですが、イ、ロ、ハ、ニ・・・と並べています。イは、1年生も取ってほしいけど、インタビューテストをやる先生もいるかも知れないよというふうなことが書かれています。

ロは、単位はすべて1期1単位と書いてありますが、基本的には各学部の裁量だと思います。

ハはいいとしまして、ニというのは、大教センターの将来と関係があると思うんです。先ほど池田輝政先生がカリキュラムデザインというものは、スペシャリストが引き受けるべきことだとおっしゃいました。個々の授業のコースデザインは先生方みんなが考えるべきだけれども、カリキュラムデザインというものは、スペシャリストが考えるべきだということになりますと、このような新大の英語教育すべて、つまり各学部が行う英語教育も、英語学系が行う教育も、英語教育学のシラバスデザインとかカリキュラムデザインの専門家が、やはり1人か2人センターの中にいて、そして長期的に考えていくことが必要ではないでしょうか。それは英語教育部門というふうに「中間報告」では提案されています。そしてそのようなスペシャリストの先生方には、御自分の研究や実践にプライドを持てるような研究・教育上の条件を保障することが大前提ですが。

ホとへは省略します。トのほうも、これは我々教務関係の非常勤依頼の際のバッティングを防ぐべきだというふうな議論ですから、いいと思いますが、チのほうは、旭町キャンパスの医学部、歯学部に関することです。旭町での中・上級英語は5コマ、今年どおり実施します。

ただし、医歯系の特徴上、定員は30名として、そしてそのスキルのほうもスピーキング、つまり英会話に絞りました。この辺のことは、8月の最初の教養教育実施委員会で、この案を示して、各学部の代表の先生方に報告済みです。

最後に、付記というところに行きますが、これは私が言いたかったことを特に書いたんですが、新しい中・上級英語といいますものも、開店はしてみたものの、全く聴講生が集まらないという状況をさけたいと思っています。とりわけ、やり始めた2、3年間は、学生が抽選にもれて文句を言うくらい集まってほしいと願ってい

ます。2、3年生はもちろんですが、各学部の1年生の中には、例えばもう入学のときから英検2級を持っている者が少なからずいます。英検2級を持っていますと自動的に初級の英語の2単位が与えられます。GPA計算だったら工学部だと90点を与えてもいいというふうなことになると思うんですが、その英検2級を持っているような1年生は、中・上級のEGPや、EAPや、ETTを取ったほうがいいよと言ってももらってもいいぐらいです。

それから、高等学校のとき英語が得意だったという自負を持っている学生や、英語圏からの帰国子女、英米じゃなくても、シンガポールに住んでいたとか、フィリピンに住んでいたとか、マレーシアでもそうですが、英語を使うのになれている、そういう学生には、ぜひ勧めてやってほしいのです、そして各学部の教務関係の方にお願したいんですけれども、IA、IB相当の各学部の初級英語を取らずに、そのかわりに中・上級の英語を受けて合格した学生には卒業要件単位として読み替えるための規定をととのえていただきたい。そうしますと、学生も、ちょっと難しそうだけれども、じゃあこれにチャレンジしてみるかというふうな、そういうエンカレッジメントになるのじゃないかと思います。

以上、英語教育に関する改革の現状を説明いたしました。「中間報告」に関しては、金子先生も、今、御出席ですので、質問していただきたいと思います。

以上です。

★司会

ありがとうございました。

この「中間報告」に沿っての改革は、学部によっては具体化していることもあろうかと思いますが、福田先生、あるいは金子先生がいらっしゃると思いますので、質問がありましたらお願いいたします。

★福田

一つ言い忘れましたが、IA、IBというネーミング、これはできるだけ廃止して新しいものを考えていただきたい。内容が見えるものを考えていただきたいと思うんですが、なかなか名案が浮かばずに難しい面があります。教育人間科学部はIA、IBというのをやめまして、エデュケーション英語とコミュニケーション英語というふうに、カタカナで出してきておられますが、エデュ

ケーション英語とは何かと申しますと、世界中の教育に関するさまざまな情報を英語で読むんだというふうなことだと思います。教育に関係するもの、そういう事項を英語で読むんだという表明だと思います。ネーミングの問題は難しく、これから1カ月ほど皆さんにいろいろ各学部で相談していただくことじゃないかと思っています。できるだけIA、IBという名称をやめたいと思います。

というのは、英語II、英語IIIという名称がなくなります。これはもう確実に決定しております。今、説明しました中・上級英語になります。実は時間割も中・上級英語についてはもうできています。大体既存の英語IIとIIIに当てはまる時間割のスロットに入れていますから、どの学部の学生諸君もどれかを取れるようになっています。そういうふうを考えてもらって結構です。

★司会

何かございませんか。

★出席者

既に教養で科学英語みたいなものを教えたことがあるんですけども、理学部というのは、例えば数学と、うちの生物なんかで、人文の先生方から見るとどのようにごらんになっているかわかりませんが、非常に乖離しているんですね。農学とか工学に比べると、恐らく理学部はもっと学科がばらばらになっていると思うんです。

それで私も生物学とか化学を中心にした題材をとりましたが、一番困ったのは数学の学生なんです。数学の先生から論文を借りて読んでも、英語が特殊でわからない。

結局何が問題かと言いますと、同じ理学部と言っても、専門に特化して、それをやったら学生がモチベーションが高まるような英語を考えるというのは非常に難しいんですよ。どういうものをイメージしたらいいのかが、これからのし作業としてあれば、非常に難しいんじゃないかと思うんですけど、その辺何かアイデアがありましたら。

★福田

今のところあまりはっきりしたアイデアはありませんけれども、数学科の学生に対して数学の英語をずばり教えて、果たしてうまく動機づけができるかどうか、果

たして学生たちは喜ぶかということがありますので、理学部のように本当に細分化したところでは、日常科学的な世界とか、自然科学的な考え方とか、そういうものを書いたテキストを読ませるということだろうと思うんですが。だから一方で我々英語プロパーのような人間がやれることは限られていまして、専門的なことはできません。

ところが、理学部の先生方は、むしろ非常に専門的な英語を読んでおられるので、何をやるかによって我々がやったほうがいいのか場合と、実際は専門の先生がやられたほうが効果的な場合もあると思うんです。それを言いますと、我々理・工の教師が英語の担当をやって、人文の英語の関係者は逃げるのかと、そういうことをおっしゃる方がいらっしゃるようですけれども、そういう話ではなくて、使うテキストや、やり方によって英語プロパーの者がやったほうが効果的な場合と、やっぱり専門の先生がやられたほうが学生は納得するということもあると思うんです。そこはどんなテキストで、どんな授業をやるのかという、まさに相談ごとだと思うんですけれども。

先程ケンブリッジやオクスフォードの教科書なんかのことを言いましたが、そんなところからわりと理科系の学生のためのイングリッシュというか、そういう教科書があるかもしれないんですよ。私はそういう点で教科書の専門家じゃありませんけれども、教育人間科学部の先生方にお聞きすれば、あるかもしれません。それはやっぱり特殊目的の英語(ESP)とか、職業目的の英語(EOP)とか、そういう区分が随分イギリスでもアメリカでもあるらしくて、そうすると、ESPとか、アカデミック英語(EAP)とかの区分で、物理学の学生のための英語教科書だってあり得ると思うんです。

★出席者

直接カリキュラムの問題とは関係がないようなことなんです。自分の研究室に入ってきた学生の英語の教育というんですか、英語の力をつけるのに、こういうことを言っているんですが、それが正しいことなのかどうか、御意見を。

私は、わかりやすいというか、例えば工学部ですけれども、そうしますと数学の線形代数とか、簡単な数学であるとか、電気回路ですとか、そういったことは誰でも

が知っているような内容、そういうもので比較的センテンスも短い読みやすそうなものを選んできて、それを読めと。それは繰り返し読めと。わかるまで読めと。決して日本語に訳すなと。すらすら読めるまで、わかるまで読めと。だまされたと思って3カ月やりなさいというふうに言っているんですが、やっぱり、翻訳するというのが私は大変大きなまずい点で、繰り返し使うというか、それになじんでいくというのがあれなのかなと。

そういう意味では、新潟大学の教育の中で、英語だけで、留学生が半分、日本人半分で、日本語は一切使わないというようなコースというんですか、試みとしてそのようなコースを九州大学とか東工大のようにつくられてやってみたらおもしろいんじゃないのかなと個人的には思っているんですが、いかがでしょうか。

★福田

今、先生がおっしゃったこと、本当に日本語に一切訳さないで英語を読むこと、それは非常に大事なことです。英語の教師もそう考えているんですが、つつい日本語に訳してみようとか、訳してみなさいということで、訳読する。訳読は文法の知識を確認するのには適していますが、一方で、日本語に訳さないと気がすまないというふうな悪弊といいますか、そういうのは日本の私たちが受けてきた英語教育、あるいは受験の和訳問題の弊害というか、とにかく英語を見たら学生に何か日本語に訳させてみないのだめだというのは、よくないと思います。

本を読むというのは、我々が専門文献を読むときも、いちいち日本語に訳したりしないわけですから、要するに英語のまま理解していけたら一番理想ですよ。それはそうだと思いますし、これからの日本の大学は変わって行くと思います。要するにオールイングリッシュのクラスをどんどんふやしていこうという動きもあります。しかし、また一方で明治以来築き上げてきた日本語による学問体系があります。すべての学問体系を日本語で記述できるということですから、日本の大学は最後まで日本語による大学教育というものを圧倒的な割合で維持すべきだと思います。医学でも芸術でも全部日本語で記述できますよね。それは非常にすばらしいことで、それはもう絶対に大きな割合で残すべきです。しかし一方で、英語によるコミュニケーション能力は、やっぱり一歩日本を出た途端に要求されますし、海外から学者が来たら、

またすぐそこで英語が要求されます。だから、日本の大学レベルでの英語教育におけるオールイングリッシュの授業の拡大や、英語で学問の話をしなくちゃいけない場をふやすということが必要になると思います。日本語と英語の兼ね合いというか、バランスの問題だと思いますが、これからはきっと英語で自分の勉強している分野を話して議論しなくちゃいけない時代がきっと来ると思います。

★荻

人文学部の荻なんですが、入試制度委員会というのが人文学部にありまして、それでちょっといろいろ話合っている中で出てきた問題なんですけれども、個別入試の外国語の選択科目の中に英語のほかに幾つかいろんな科目があって、その中に中国語というのもあったりするんですね。それで、その個別の試験科目の選択科目の中に中国語を入れるべきかどうか。今までは入っているわけなんですけれども、それをどうしようかという議論がありました。というのは、センター試験にも選択科目に中国語というのも入っておりまして、ですから学生でセンター試験の中国語を取って、個別試験で中国語を取って、そういう学生が入ってくる可能性もあるわけですね。つまり、英語教育というのはほとんどやってこないような学生さんも入ってくる可能性があるかと。

ところが、現在の教養の英語教育では、初級の英語というのが全然備わっていない、その点は、今回の改革等で初級の外国語とか、そういうことが少しは考えられたりするのかなのかということですね。大分入試の科目とも関連してきますので、その辺少し何か議論があるのか、それともこれから可能性があるのかというようなことでちょっと何か議論がありましたならば、あるいはなければその辺何かお考えがあったら、ちょっと聞かせていただきたいと思うんですが。

★福田

今、荻先生が言われたことは、今後いつそう問題になることだろうと思うんです。本当に難しいのは、先ほど基礎英語という理工向けのクラスのことを言いましたが、その英語を受ける学生たちは中高で一応英語を勉強していますので、英語は苦手だけれども、というのとはかなり異なるケースです。今、荻先生が言われたような、一度も英語に触れたことがないという場合は、本当に中

学校1年、2年あたりの英語の授業をやらなくちゃいけないんです。これはもうABCの発音からやらなくちゃいけないわけで、大学英語の問題かどうか、疑問です。

つまり小林先生が言われたようなリメディアル・クラスというのも、どの辺までをリメディアルの対象にするのかということもありますよね。つまり中学校レベルの英語も勉強したことのない学生もリメディアルの対象とするのかどうかということです。

だから、その場合の一つの見方は、やっぱり英語の基礎は自分個人か誰かについて、一つは学生のチューターなどについて習って、そして理工向けの基礎英語のような、基礎を勉強するクラスに入っていくというしかないかなと思います。もし荻先生が言われたような学生が50人、60人と多くなってきたら、一つのリメディアルのクラスをつくらなくちゃいけないかもわかりませんが、そこは大変難しいところで、何とかして新大生の大学院や学部が一種の国際ボランティアのような形で教えるか、チューター制度をつけて、英語のチューターというような形でやるとか、過渡的にはそういうものを混ぜていくしかないと思いますけれども。

★小林

今の御質問につきましては、福田先生のほうで今、お答えをいただいたんですけれども、現在、新潟大学の中に学部によって違う、外国語に関する2種類の教育方針がとられております。大多数は、単位数はとにかく2カ

国語ということでやっているところがございます。

しかし、法学部ないしは、また検討中ということで経済学部は異なります。法学部では1外国語6単位ということで教養科目の関係はそういうふうには押さえておいて、そして1外国語だけでもものにさせようというようなことで、卒業までには約30単位を、学生たちには、1外国語であるけれども、課すというようなことをやっているわけですね。

ですから、このように考え方の違いがなおあるんですけれども、今、外国語教育改善の「中間報告」というのが出た段階で、英語教育の改善のほうは進んだということなんですが、外国語教育全体の、それはどういうことなのかということについては、今後の議論として残っているというふうに思うんですね。それで、この議論は、恐らく教養教育の実施委員会とか、そういうレベルだけでは済まない。各学部が本当に外国語教育を有意義なものとして現在の大学教育の中で位置づけていくということを通じて、論議の中で展望されていくようなものではないだろうかということで、「中間報告」以後の検討もなかなか難題であると思っているんですけれども、実情はそういうところかと思うんですね。ですから、人文学部が今の段階でどういう方針で臨むのかという、その問題でもあるというふうに思うんです。

私は、今の状況を御説明申し上げました。

報告と討論2 「授業における工夫を共有するために」

★司会

第2部の報告と討論「授業における工夫を共有するために」を始めたいと思います。

第2部では2つの発表がございまして、前半のほうは、加藤かおり先生のほうから、学生による授業評価を行ってまいりましたけれども、その授業評価から授業を考えてみるということです。

2件目のほうは、吉永先生のほうから、私が取り組む授業改善ということで、吉永先生の取り組みについて紹介していただいて、FDの成果を新潟大学の教員全体で共有しようというねらいのセッションになっています。

それでは加藤先生、早速お願いいたします。

(1) 学生の授業評価について

★加藤

大教センターの加藤です。よろしくお願いいたします。

きょうは、昨年度の後期に授業評価を再開いたしましたので、その授業評価の現状と、それから、その結果の傾向などを大まかに話させていただきます。さらに、これは私のほうから、その結果をもとに授業改善に対する課題を幾つか提示させていただきまして、議論の糸口と